

# 中流住宅の平面構成に関する研究

## 第2報 研究の方法と仮説モデル

○正員 宮崎信行<sup>\*4</sup> 同 青木正夫<sup>\*1</sup> 同 竹下輝和<sup>\*2</sup> 同 磯貝道義<sup>\*3</sup> 同 友清貴和<sup>\*3</sup>  
同 中園真人<sup>\*4</sup> 同 岡 俊江<sup>\*6</sup> 同 大津博幸<sup>\*6</sup> 同 深野木信<sup>\*5</sup>

はじめに

今日の中流住宅において、2階部分を除く1階居住部分が4室で構成される住宅平面を「基本平面型」とすれば、公的空間は「座敷系の公室」と「茶の間系の公室」の2公室を有するプランが成立する。

座敷系の公室とは、いわゆる続き間座敷であり、接客空間としての公室である。これに対して茶の間系公室とはDK-L (Lが和室の場合を含む) であり、家族空間としての公室である。

これら2公室を含む基本平面型は、農家の田の字型平面にあまりにも類似している。

明治以降、中流住宅平面構成の史的発達の考察を通じて、今日の平面構成のあり方を展望しようとする本論の立場からすれば、まずもってこの田の字型平面の構成原理を改めて解析しておく必要があり、それが史的発達の概観を得る際の分析の有効な手がかりを与えると思われる。

### 1 公的空間の構成原理

田の字型平面とは、周知のように南北軸に土間部分と床上部分に分かれ、床上部分が田の字のごとく4室に区画されている平面である。

その「床上部分を、南の土間側からA、その裏をB、その奥をC、表の奥をDと符号をつけると、田の字型床上部分はA・B・C・Dと呼ぶことができる。この4空間は夫々に機能も異なり、空間のしつらえも特色のあるものとなっている。<sup>(\*)</sup>

それぞれの空間の機能を単純に言えば、A空間は日常的な接客に供する応待の場であり、通常デイとかオマエとか呼ばれる空間である。B空間はダイドコロと呼ばれる、調理兼食事の場(以下「茶の間」と称す)である。C空間はナンド・ハヤと呼ばれる家族の就寝室(「主寝室」)であり、D空間は床の間をもつ客間(「座敷」)である。

これら4空間は、土間部分を含めて、東西軸によってオモテ側の接客空間、ウラ側の家族空間としてのみ説明され、接客重視の悪しきプランとみられてきたのだが、このような見方が一面的であるという指摘はす

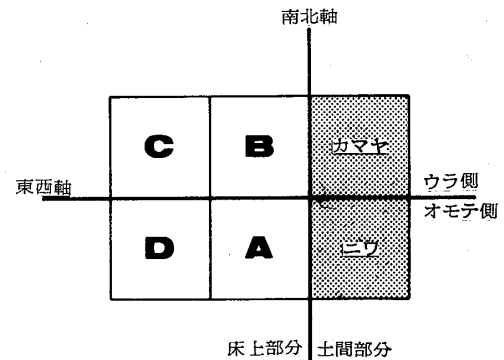


図-1 田の字型平面のモデル図

でいくつかなされている。本論はこの立場から以下平面構成の原理を解析する。

4空間のうち、B・C・Dの各空間はかなり単一化された機能空間であるのに対して、A空間のみはきわめて複合的な機能をもつ空間である。

その複合的な機能の第一は、D空間(座敷)との関連から生ずるものである。すなわちD空間に対しては、いわゆる格式的な前室としての機能を発揮する一方で、D空間における多人数接客の延長部分を受けとめる続きの間としての機能(D')をも有している。

第二はB空間(茶の間)との関連で生ずる機能である。B空間に対しては、茶の間でのプライベートと生活秩序を確保する機能であり、これはA空間が本来持っている応接の場の機能に対応するであろう。他方B空間からの家族的利用の拡大を受けとめる機能(B')をも有していたことが重要である。

例えば農家では、盆・正月や農繁期を除いて、夕食後の「夜なべ仕事」は日常茶飯事であり、それが家族だんらん性格をもとっていた。その仕事場は、土間部分のニワでなされるだけでなく、A空間でなされることもあったし、特に着物の仕立てや蚕の飼作りはA空間でなされたのである。また夏の暑い夜に涼を求めてA空間に移動したり、とりこんだ洗たく物の置き場としての利用など、B空間でおさまらない家族的利用をA空間が受けとめていた。この意味では家族の日常生活空間でもあったと言えよう。

さらにC空間との関連で生ずる複合的な機能の第三は、

副寝室としての機能である。老人や成長した子供が住宅内で就寝するときは、主寝室からちょうど対角線上の位置にある、このA空間が使用されたのである。A空間の副寝室としての機能(C')は、公的空間構成を考察する際、直接には関係しないが、平面構成全体を考察する際に重要となる。また老人室を1階に設ける場合には直接関連してくる。

その他、A空間の複合的機能は、土間に対しての玄関間としての機能もあるが、中流住宅はすでに玄関を確立し、廊下あるいはホールとして機能分化が行われている。

以上、A空間の機能を中心にその空間構成原理を追求してきたが、公的空間としてはA空間がB機能とB'機能とを複合させていたとの理解が重要な意味をもつ。その意味で、従来から定説化されているA空間の格式的位置づけにのみ固執することは不毛であろう。すなわち、接客利用と家族利用を巧みに使い分けできる、いわば調整空間とみるべきであろう。しかしまたそうであるからこそ、他方では後に分化せざるを得ない矛盾をも蔵しているのである。

なお、A空間が格式空間として当初設定されたとしても、徐々に家族の利用が拡大されてきたと解釈すれば、問題の性格はさして変わらないであろう。

さて、A・B・C・Dの各空間のつながり方を全体としてみれば、年中行事や人生儀礼などの人や物の動きにきわめて適合することとすでに指摘されている<sup>(\*)2)</sup>。多くの場合、客の動線はオモテ側に限定され、家族の動線、サービス動線とクロスしない形となっている。すなわち客の動線は、A空間からD空間へ、他方サービス動線はB空間からA空間を経て、D空間に達するというものである。

このような接客行為によく適合することから、諸行事や儀礼等の空間的装置とも呼ばれる論理性を具備する点にも田の字型平面の特徴があると言えよう。

## ② 玄関位置と機能構成の変化

これまで述べた田の字型平面の空間構成の原理は、その出入口がまさに土間部分の位置にあったからである。このことは、床上部分が田の字型そのままの形であっても、その出入口の位置が異なれば、当然、諸空間の機能が異なり、従ってまた平面構成全体の意味も異なることを示す。

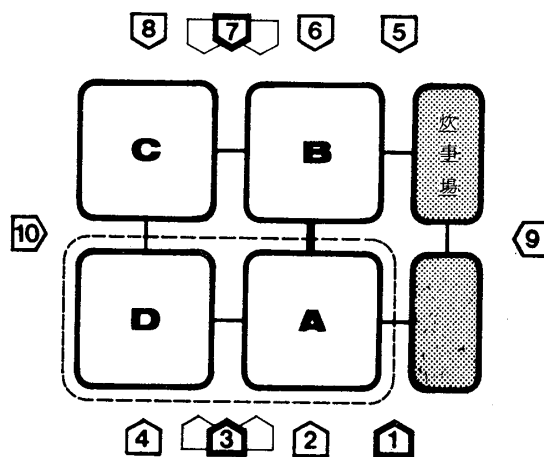


図-2 玄関のとりつき方

機能変化の最も顕著な空間は、やはりA空間であり、複合していた機能のいくつかが分化したり、あるいはC空間にD機能が付与されるという変化をとげる。公的空間の考察では、B空間の機能分化とD空間の機能分化に注目する必要がある。

さて、今日の中流住宅プランをみると、あるいは後に考察しようとしている明治以降中流住宅プランでも、土間部分は縮小ないしは消滅しており、玄関が確立し、A空間の玄関間的機能はすでに機能分化しているので、A空間の変化を考察する際、この機能は無視して論をすすめる。

図-2は、田の字型平面(土間部分縮小)に、玄関がとりつけられる場合を想定して、描いたものである。②、④、⑥、⑦は、それぞれ別の室に玄関がとりつく形で、機能的にはそのとりつけられた空間が通路空間ともなるもので、きわめて不安定である。このような玄関のとりつき方は一般には成立しがたい。②の場合は、この玄関とは別に土間部分に出入口があれば成立しようが、明治以降中流住宅の平面動向は、むしろ土間部分を消失しつつあったことから、この玄関は③に移行せざるを得ない。その意味で②は③への過渡的形態とみなしうる。

次に③、⑦、⑩は、床上部分の諸空間を割って入りこんだ割り込み型であり、前述のような困難さは避けられる。この割り込み型は、その割り込むスペースがどちらの空間に片寄っているかによって、さらに2つのタイプに分けられる。図-2では、③と⑦の場合のみ図示している。③の場合は、A空間の一部が割られる場合と、D空間の一部が割られる場合とである。

同様に⑦の場合にはB空間の一部とC空間の一部とが割かれる場合を示している。

さらに玄関のとりつき方で①, ⑤, ⑨は, 土間部分が床上化して玄関がとりつけられるか, あるいは土間の一部が居室化して, その居室と従来の床上空間との間にとりつけられる型である。⑤の場合は, 炊事場と食事場(B空間)を分断することになり, およそ考えられないし, その実例も見られない。炊事場がB空間の内部に一体化する, いわゆるDK形式をとる段階では, ⑤は⑨に移行したと考えられよう。

玄関位置の相違による平面機能構成の変化は, 第3報以下で詳細に展開される予定なので, ここでは概括的な点にのみふれたい。考察の対象とした玄関のとりつき方は①と③と⑦である。

⑦は北入り割り込み型で, この場合, 玄関位置がB空間からC空間側に移行し, 座敷D空間に直接アフロ一キできるようになる。その結果, C空間の機能は著しく弱まり, むしろA空間のC機能と交替していく。また, D空間への客の動線は縮小し, その格式的性格を消失する一方で, サービス動線としてのB空間からA空間を経てD空間に至る構成は確保されている。

①と③はいづれも南入りで, 前者は今日の農家住宅に多くみられ, 機能構成はきわめて安定的である。

後者は, 従来の続き間座敷のつながりを真ん中から断ち切る形となり, 機能構成は大きく変化する。すなわち, 従来のA空間はB空間に転化し, A空間のD機能はC空間に付加され, 転用続き間の形式となる。この場合も⑦と同様に, 客の座敷への動線が短縮してもサービスの動線は, B空間から主寝室としてのC空間を経て, D空間に達する構成は確保されている。

### ③ 平面構成の論理仮説モデル

上述した平面構成の論理を 今日の中流住宅平面の仮説的に適用してみれば, 以下のようなモデル図を得ることになる。

#### ① 4室型の場合

図-3はDK-Lの平面の中心に置かれるため, 知らず知らず「公室型」として分類されてしまうアウンである。しかしよく見るとLの右側和室は, Lの向をついた座敷である。従って, この場合のLは座敷に対するLの向としてのD機能をも兼ねることが可能であるため家族だんらんB機能とを合わせた複合空間

となる。玄関から直接座敷に入りうるアウンとすれば, これは4室型の空間構成の1つの典型的なタイプである。機能構成の変化からみると, 玄関の位置がC空間の位置にくることにより, 当然C空間がA空間の土間方向側に隣接されたものとみなすことができる。(図-4参照)

次に, 図-4は公室型と続き間型との折衷型として解釈できることが多いアウンである。この場合はA空間の複合的機能はDに分化している。すなわちB機能はLとして独立し, 他方のD機能はC空間に付与され, 主寝室兼用の続き間と形成している。Lの向のいわゆる格式性はDに失われおり, このアウンは4室型の空間構成のもう一つの典型とみられるのである。

以上のように, 4室型の場合, 座敷に連続した続き間を確保しようとするれば, その続き間としては, Lが主寝室かというわけがない。図-3はLがあたり, 図-4は主寝室があたりしているのである。

しかし, これら両方にまたがって続き間と確保することも可能である。その例が図-5である。同様の図の字アウンに近似した形となる。

#### ② 5室型の場合

図-6は, 農家住宅によく見受けられるアウンタイプである。もっともこの場合, 図中の洋室は和室である。またLは和室の「L」であることが多い。このアウンは, A空間のB機能とD機能の両機能がそれぞれ分化して, 室として独立したものである。座敷続き間の和室には, 広縁側に一向檜の押入れがあるというものの, 副寝室としての機能は少なく, D機能の純然たる機能分化とみなしうる。

これに併して図-7の事例は, C空間にD機能と付与する一方で, 副寝室のC機能も分化させたものである。このC機能空間は, 老人室や子供室としてとらえられる場合が多いが, 主寝室として利用することも可能である。就寝空間の配置は, 対角線就寝の原理が維持されている。

#### ③ 6室型の場合

4室型, 5室型が既述の論理で説明できることからは, 6室型の説明はむしろ必要ないであろう。図にかかれた事例は, いづれも, B機能, D機能, さらにC機能の分化として説明されるからである。ただ注意可

べきは、図-8の場合には座敷に押入れがあり、図-7の場合には和室にそれがある点である。この押入れ設置の意図は、両事例の場合に明らかに客の宿直室と意図したのである。

以上のように、図の字型から抽出した空間的室内構成の論理は、かなりの程度まで、現在のプランを説明しうることか了解される。

④ まとめ

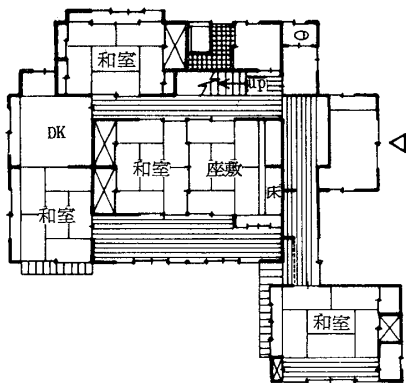
明治以降の都市中流住宅平面様式の史的発達を論じた木村徳國氏の既往の論文では、住宅平面の様式として固定とし、その内部の室機能の変化と空間構成全体の考察がきわめて不十分である。そのため、今回の問題となっている空間的室内構成のあり方と史的に考察する場合、必ずしも充分とはならない。

以下に続く報は、前述した平面構成の論理で、明治以降の中流住宅平面構成の史的発達を辿って見たものであり、併せて中廊下型住宅平面の成立に考慮したものである。もとより資料が限定されているので、いまだ仮説の域を越えないものであることと付記する。

(※1) 日本建築学会 農村計画委員会住宅部会 1981.9  
「農村住宅研究の科学的規準作成にむけて」(P.128)

(※2) 佐々木嘉彦  
「東北地方における農家の住宅間取りと住み方および住生活の構造に関する研究」

図-9 6室型の事例(2)



仮説モデル図

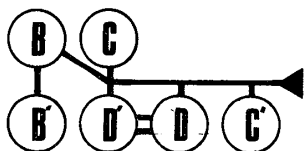
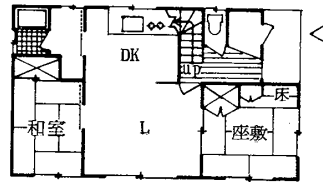


図-3 4室型の事例(1)



仮説モデル図

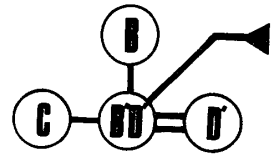


図-4 4室型の事例(2)

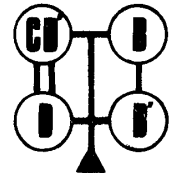
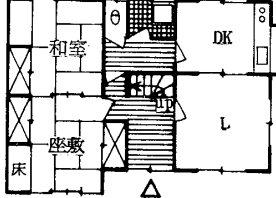


図-5 4室型の事例(3)

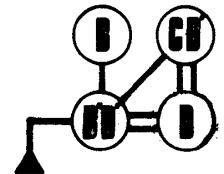
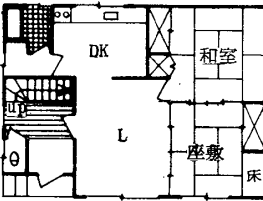


図-6 5室型の事例(1)

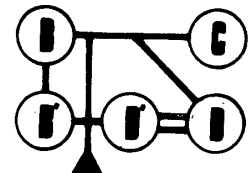
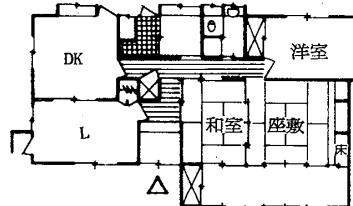


図-7 5室型の事例(2)

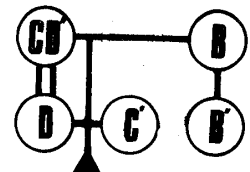
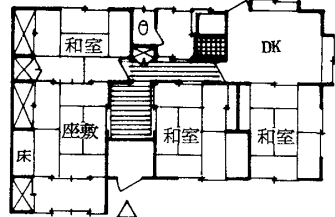
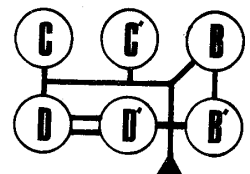
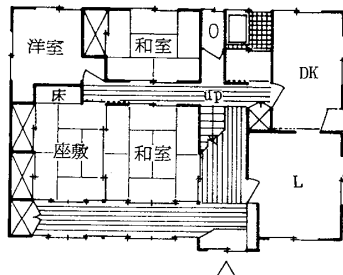


図-8 6室型の事例(1)



\*1 九州大学教授・工博 \*2 同講師 \*3 同助手 \*4 同大学院生 \*5 同学生